

梅園叢書

第二集

一名拾葉

下

庫	文	閣	內
九 函	一 冊	二 七 二 八 三 號	和 書 類

止三冊

內閣文庫	
番號	和 27282
冊數	3 (3)
函號	190 184



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



梅園拾葉卷之下



目錄

三 答多賀墨卿

戲示學徒

長州赤間關二人のうらまゑ

一 豊前僧禪海



明治十二年購求



梅園拾葉卷之下

豊後 三浦晋安貞 著 加藤修子睦 輯



三谷多賀墨卿

神氣本氣の分並に前書膽者其系上屬肝臟下著胃
 只化精於飲食之氣為岷之根與臍之收天氣為息之
 原對の文うと孫く御尋に御座候醫家素難を金科
 玉條より從來依様く葫蘆を畫を候故其垢心を漆
 く物の真體をえう孫候條理の道ハ天門の鎖鑰ハ
 一と流に沿く分を源に沂つと合一聊も意巧造作

拾葉下

一

よく安排をなすべき物とあはれ候、益大物より萬
物に至りて、其物を成すよおわてハ、氣天物地の中
性體とりよりのを具矣、然ふて體よく用を分ち、
性よく才を分ち候、神本の二氣ハ、唯人との有る
物とはあはれ、りし天の有るりのを人資く已ら
有とせりりの候、本氣とハ體成とよく其體を用
ゆるの氣也、神氣とハ性具とよく其性を運ぶの
氣なり、故は神氣人よおわてハ、其有る所の意也
本氣人よおわてハ、かく活動する生の氣なり、意中
ハ心性あり、心の運びく思ひ慮り知至辨ゆるも

のを意智とりよ、性の感とく愛憎欲惡するりのを
情慾とりよ、即是性よりて、あきを運とく守禦の態
和激の聲行止予奪の事をなせハ、其才也、生中ハ天
より得るりのあり、天より得るりの、物よ依らるるを
ハ立難し、其物よよるとは、天氣を呼吸とく、よく表
を衛至、地質を飲食とく、よく裏を營矣、即これ用よ
しと、それハ體とく、臟腑の文筋骨の維、膏血温動の
物をなすハ、其體也、人く身身をいうとく、有る
るどとけりよ、それりし天の有るは處りて、そ
れを人よ給し、人よきを天よりてなるりのり

拾葉下

二

く、給資の間ふ始繼の二氣あり、資始むるもの保持
奉役の精力なり、資繼りの、營養衛護の息食なり、資
く始むるものハ、天ふ得るものより、資く繼りの
ハ、息ハ天氣をうり、食ハ地質を資りて、其資始の氣
を營養衛護するものなり、故ハ精力ハ營養を以て
立川、營養敗きをうくをハ精力困一む、精力已ハ盡
ハ、營養用了所なし、故ハ保持奉役、營養衛護一て、其
本氣全く、思慮知辨、愛憎欲惡一て、その神氣全一、神
ハ神妙不測の靈一く、物混淪一て立川の中ハ
活一、物ハ磅礴無邊一て、神鬱滯一て活するもの

表ハ立川、立ハ就て本氣といひ、活するハ就て神氣
と一ハ、萬物ハ通一て皆去りたり、蓋其本氣の立ハ、
資く始むるものあり、資く繼くものあり、故ハ候、神
氣の活するハ、性感するハ、才運するハ、ある故
ハ候、精一うんぐ一て此身を保するハ、内持
するものあり、大物一ていハ、地なり、外保するもの
のあり、大物一ていハ、天なり、力一うんぐ一て此
神を奉するハ、物其神を奉するもの力あり、人
みく一ハ、臣の奉戴也、氣其物を役するもの力あり、
人みく一ハ、權柄也、性一うんぐ一て感ずるとなる

合葉下

三

きハ情慾好惡をもを以て候才いんぐて運
まるとなまきハ、意智よく知運をもを以て候あ
るに於て神氣神を用ひて意をなす、本氣物を立て
人をなす候、是を以て物を見て善と知り、惡と知
る、愛憎欲惡の感應より、或ハ予へ、或ハ奪ひ、或ハ活
し、或ハ殺し、譽め毀る、興亡ぶるも、共ニ有意の所
作する、思ひ運び、知る、辨まへ、好惡ニ感應い
たし候、このゆるは神氣ハ君の位ありて、本氣ハ民
の位なり、君民の事、位をいへハ、君尊く、民卑し、序を
いへハ、民本ありて、君標なり、其故ハ人衆ありてこ

きを治むる為は、君長く、君長くちて後人衆を設
くる、ふあ、然も共位ハ君在上、然ふく號令控
掣の權をもち、民在下、然ふく奔走驅馳の役をと
る、故は本氣ハ民の如く、神氣ハ君の如く、本氣本
りて、神氣標なり、神氣尊ぶりて、本氣卑し、故は奉
るハ、神氣の為は基をたし、其神氣を奉るなり、
役するハ、神氣の為はみつら、はきて、こそふ奔走驅馳
するなり、此故は物混淪して立ちのハ、本氣の幹
まるとなまき、意鬱滞して活するりのハ、神氣の運を
するなり、其本氣即天ありて、神氣即人なり、天人の差

別ハ、有意無意の間よく御座候、古来有意無意の辨
味立候故、先達も是を混淆して、天を觀る事、皆人意
の私ニ落候、此故ニ天ハ無意人ハ有意と分川く、其
人の中より亦天人あり、其故ハ天成人人成于天を
以て候、天の成を處ハ無意なり、人の成る所ハ
有意ニ候、是又人の天人を平分する故ニ候、其天成
入者ハ、本氣よりして、人成于天者ハ、神氣ニ候、此無意
なる者ありて、生の本をなし、有意なる者有る生の
精華を發する事ニ候、先此大分を御理會ありて、下
文御熟玩可有候、尤文面ハ天ニありりのを、書留候

よく、文面を離せ、真物をよく御察し、可被成候、真物
よく、面前ニありり候へハ、拙文ニ謬誤あり、バ、謬
誤直ニ御目より、よく候、夫氣ハ物を離せ、物
ハ氣を離せぬ物ニ候、古人天地未成以前、溟濛混沌
なる氣の、ある様ニ説をなせり、ハ、氣を知ざる故
ニ候、故いふんとなせ、バ、物ハなく、只氣の、ハある
事能く、よく候、火といへバ、焼るりの、其中ニ
發し、焼るといへハ、火、其中ニあり、如し、故ニ身獨
活せん、神よりして、靈をなし、神獨立せん、人の體を
宅として、活し候、人の體ハ保持奉役、天ニ得るりの

て、營養衛護の物より依り立川事候衛
 護とハ、今提燈は火袋あるも、衛護とせんとの設也
 夫火袋の用たるや、風吹を雨降をくも、おきう外を
 衛護するより、よく燈の防をなすなり、營養と
 ハ、提燈の蠟燭を具ふる如し、蠟燭よく火を養ひ、其
 天を得る處の火の光をも熱をも營に繼ぐ、そあ
 なくふあつむる如し、火袋よく外来の風雨を
 防げ、膏膩の養なす時ハ火存せし膏膩あれを
 養へども、外来風雨の防たなす時ハ火又立し、保
 持奉役ハ、天より得るよりしていども、さやや

それふあつむる提燈の器はほひるのみ、蠟燭の
 營養よりれども、蠟燭又臺まけさハ立し、臺ま
 箱捧ふを等の保持をとり、よく其火を奉し、火よ
 くあれよりりて、光を役夫、火ハ膏と心とふ養を資
 王、膏心よく養を火に給し、細縷その間より、火を
 營し、出矣、萬物皆あつむるハ、人身のこより同一理
 しく、其常は寒を衝き暑を觸き、霜露を犯し、雨雪を
 凌げども、こをよして病しめざるのハ、こが保持奉
 役するのを衛護をさハなき、苟此衛王を失
 へハ、風雨寒暑瘴癘の毒、あつむる外より傷るなり、營

ハ一身氣血精神の仕出しなり、網縕す其内なる故、男授け女受け、子その内なる、母乳子吸ひ、養その内なるも、同ト網縕の營なり、春花され葉生ひ、秋ハ葉脱し實結ぶも、同ト天地の網縕なり、故ニ養ハ生々を物給し我資るの間より、水穀塩蔬酒漿肉味の給する所を資至、我氣液骨肉となし候、此營養ニ傷をうけ候へハ、氣液骨肉營養の源竭きて、吐瀉閉癰血液湧溢せざれば、乾枯骨立を致し、終ニ天成の元氣を賤賊也、故ニ函籠全し、膏膩盡るも、膏膩備川て、函籠をぬるも、提燈

の用成ざるにおおてハ、一ニ候、其營養と云ふのハ、飲食胃入至畜すも、肝上より覆ひ、脾下より捧げ、胃をさしこみ、鼓動をなし、飲食の精をより、轉トて氣液骨肉とあり、一身ニ周布して、造化の用をなし、其查滯腸中ニ下至肛門ニ出川、小便ハ古説異同ありといへども、其大概水穀一所ニ混入し、然し、後便溺泌別と観る故、小便も泉を窺はるる、くく、様ニ思ひなし、其泌別の處ををきとさし、或ハ膀胱ニ上口ありなると、壁越し推量の説のさして、徹見の説なく候、阿蘭陀などにてハ、奇巧勝をくく

國ゆゑ、微細の器あり、よく其小經を導ひて、水と膀胱ぼうりやうふらうらうらう隧道を得る術じゆつもあまると聞き至、是ハ實徵の上然うぜんありとも知らん、よしや此隧道ありあもせよ、溺の道路全ぜんく其道より洩しやうを注つくとせば、造化の用ハあし難がたうらうべし、予よを觀かんる所を以てを色ハ、便溺の事大おほいに同おなしく、大便ハ右みぎの如ごとく其道あり、小便ハ其口くちなり、此處よく工夫すべし、人ハ小天地といふも、造化さうわは異まな事なり、色ハなり、易やすも雲うん行ぎやうを雨施あめして、品物形を流ながくといへ至、先造化の用を觀かんるも、雲天を覆おほひ、雨上より下るといへども、雲

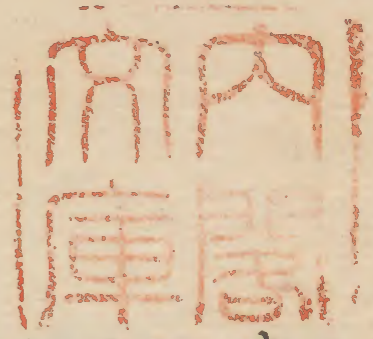
雨ハりし地の濕氣蒸々しやくとして騰た至、清際せいに閉とらるるて、雲のかさちを顯あらハし雨を結むぶ事、口より出でる氣の物ものより色ハ消くえ見みるべし、うらうらうと鏡かみを前まに置おくと、曇くも至となりて露を結むび候、是も小雨露こ候也、今雨降あらんとして、礎濕いづひ絃緩ゆるふも、雨の本と水土すゐより一ひと徴しやく候、是を以て造化の状下あうに水上すゐの質あり、此の氣の網あみ縷いとより、忽蒸騰かすして雲霧うとなり、雨其中なに結むびむも、ハ其質空あより海うみの事能とらん、下したに灑あひて萬物を潤澤うる生育じやく、潤澤生育の餘あり、終つひに川谷せんに注つき海うみに歸かへり候、若此地際水土

合葉下

八

の氣天間ニ充溢せど、夫より只下さば又流を入ら
ハ、萬物を潤澤生育せしむるにハあつべし候然色ハ
我天地造化の用も知るべく候、水穀の質胃内ニ畜
へ其氣胃外ニ蒸騰し、肝脾の鼓動によつて、一身ニ
充溢し、潤澤生育我身ニ雲霧雨露の用をおし、其查
滓下ニ歸し、膀胱ニ滲入し、川谷の用をなす、かくの如
くありて、尿ニ其口あり溺ニ其口なきの態、然らざ
る事を得ば、是を以て營氣ハ下飲食を胃中ニ畜し
といへども、消化運轉の用ハ、全く肝脾の鼓動ニあ
る、臟腑とつよりのハ、腑ハ皮を以て相續し、筋よく維

持も、臟ハ肉より、管々別物、脈あつて、こきを聯絡
も、脈とつよりのハ、肝ニ始り、腎ニ至り、枝椹蒙茸
とつて、一身にわたる所なり、飲食の精氣氣液の
運動、こなるまゝに導かれ、行と見えたり、膽ハ肝葉
の内ニおろき、精汁を畜し、脈の根となり、膽外枝
椹あり、上肝葉の内ニ著り、下胃の瀉口のうた腸の
上頭、西洋の人ハ、あつて十二指腸といつて、蛇蟲の
窠窟とせしむる所あり、その上ニ著り、是腑と臟との接
する所ありて、是より脈ニ接するより依り、脈根なり、
營養の氣ハ地賦ニ資り、衛護の氣ハ天氣ニ資り、地



臍口を門とて、天氣鼻を門とて、それより喉嚨と下
 至肺と入至、その經心と著た、其末臍と朝を、前書と
 先天後天の氣といへるハ、馴る言を以て、その
 りと、先天とハ資て始むるの謂り、後天とハ
 資て繼くの謂なり、それ兒の胎と在る、資て繼くは
 氣未用ひ故、故に口鼻の二門猶閉づ、此門開くや
 兒即生る、生るや呼吸飲食資て繼くの氣を開く、
 我ある人より事ある、兒初生已不死ぬるが如き
 者、臍帯を按ずる、淳くして動氣あるりの、猶生
 を望むへ、急不艾をとり、臍帯を灸せし、活きぬ

者ありと、我未試ぞといへども、亦此理なりともあり
 呼吸の事、呼りのハ故を出入、吸りのハ新しきを
 納せ、其事ハ飲食の精をとり、査滓を去ると同じく候、
 故に膽ハ營元なり、臍ハ衛元なり、營衛ハ一身を立
 るりのみして資て繼くの用有之候、精カハ一身の
 立川ものみして資て始むるの用有之候、精奉せし
 とハ、物の神を挑るるみ、提燈にていへば、蠟燭た
 てふと御座候、營養をばと蠟燭もあま、衛護をばと
 火袋もあり、照をばと火あまても、蠟燭たての奉る
 りとハ提燈なり候、此蠟燭たて真直と下より燭火

を奉^り候へハ、營^ぎ養^{やう}衛^{ゑい}護^ごもさうのひ、をあま^く火^ひの照^しを
事^と明^{めい}う^と、高^{たか}一^{ひと}卑^ひ一^{ひと}水^{みづ}あり石^{いし}ありと見^みる^は故^{ゆゑ}其^{その}火^ひ
小^{せう}教^{けう}へ^られ^て、上^ある^も下^{くだ}る^も、飛^とり^まは^るとも、
其^{その}精^{せい}力^{りき}其^{その}令^{れい}に^よ従^{したが}へハ其^{その}役^{やく}を^とり^なり^し是^{これ}を^し力^{りき}役^{やく}を
と^りし^故に^よ奉^り上^ある^も川^がゆ^るも^て、役^{やく}ハ上^ある^も川^が
ち^ちり^りなり^しあ^まを^を以^もて^て手^てま^ひ足^{あし}踏^ふみ、目^め見^み耳^{みみ}聞^きえ、
大^{だい}小^{せう}便^{べん}行^{ぎやう}んと欲^{ちやく}を^とり^なし其^{その}道^{みち}を^ひ開^{ひら}か^ばん^と欲^{ちやく}を^とり^なし
ま^まど^ろろ^ろとも其^{その}守^{まも}り^を失^うは^れ、是^{これ}を^し力^{りき}の^{やく}と^りし、其^{その}
力^{りき}役^{やく}を^し執^とら^ざる^も至^{いた}る^もてハ、遺^い尿^{にょう}遺^い矢^{しや}、手^て足^{あし}癱^い瘓^{えん}精^{せい}
神^{しん}恍^{わう}惚^ぼ百^{ひやく}患^{えん}萌^{もう}動^{どう}も^も事^{こと}に^よ候^に、故^{ゆゑ}に^よ精^{せい}力^{りき}ハ、資^し始^じの^き氣^き

り^て、營^ぎ衛^{ゑい}を^て天^{てん}地^ちふ^たの^む、營^ぎ衛^{ゑい}ハ資^し繼^ぎの^き氣^きなり
る^も精^{せい}力^{りき}を^て天^{てん}成^{じやう}した^のむ、精^{せい}力^{りき}已^{たり}ふ^も盡^{じん}を^とり^なし、營^ぎ衛^{ゑい}存^{ぞん}を
る^も事^{こと}能^{なり}ず^るて、我^{われ}天^{てん}地^ち閉^{へい}じ、營^ぎ衛^{ゑい}病^{びやう}めハ精^{せい}力^{りき}疲^{つか}る^も、
精^{せい}力^{りき}支^しさ^る所^{ところ}あ^まを^て營^ぎ衛^{ゑい}醫^いす^へし、思^し慮^{りょ}知^ち辨^{べん}愛^{あい}憎^{ぞう}
欲^{ちやく}惡^{あく}の^{しん}神^{しん}も、未^みま^をを^て已^{たり}ふ^も本^{ほん}宅^{たく}と^りて、用^{もち}を^てこ^の上^{うへ}に
施^せす^もに^よ候^に、以^も上^{じやう}の^{じやう}條^{じやう}理^りと^りて、御^ご考^{かう}候^に、神^{しん}氣^き本^{ほん}氣^きの
別^{べつ}可^か為^ゐ判^{ぱん}然^{ぜん}候^に、天^{てん}成^{じやう}入^に人^{にん}成^{じやう}于^に天^{てん}の^{ゆゑ}、故^{ゆゑ}に^よ有^あ意^いの^{しん}神^{しん}ハ
初^{しよ}生^{じやう}の^{とき}ハ猶^{なほ}混^{こん}沌^{とん}と^りて、開^{ひら}か^れん、老^{らう}後^ごハ朦^{もう}朧^{らう}たり
や^やま^り、晝^{ひる}よ^く明^あなり^しとい^ふへ^りも、夜^よハ必^{かな}本^{ほん}氣^きに^よ歸^{かへ}り
す、前^{まへ}に^よ申^{まを}す^も如^{ごと}く、神^{しん}本^{ほん}の^{ふた}二^に氣^き、天^{てん}地^ちも萬^{まん}物^{ぶつ}も皆^{みな}に^よま

合葉下

上

を具へ候へども物ふよめて長短有之候、天地ハ
神本ニ優劣なし、故にかくの如く悠久なり、物相ら
ながく全ふせざるハ二の態ニ候故ニ、神氣長き者
ハ本氣短し、本氣長き者ハ神氣短し、植物本氣ハ
長し、動物神氣ハ長きハ其大分なり、其神氣ハ
長きもの内又長短あり、又人よりして鳥獸を觀るも
鳥獸神氣ハ短し、故ニ本氣長し、是を以てその生る
生冷堅硬の物を食つて傷らざれば、雨雪霜露を衝く
犯らば、産育困る、ゆす喜怒相引くべし、人ハ密室ハ
爐を擁し、重綿醇酒ニ寒をぬせけり、風軒水樓ハ

たゞ倚り、絺綌水漿ハ暑を避るも、猶時りて時
氣ハ病む、米ハ糠を去り、肉ハ骨を去り、猶水火の調
熟をくり、妊娠の調護、嬰孩の抱負、本氣の短きこと
かくの如し、本氣の短きこと如此を以て、神氣の長き
こと萬物ハ備ふる、是を以て天の遠きこと、是を測り、地
の厚きこと、是を察し、羽翮なりといへども、空ニ翬
の鳥を繳し、鱗鬣なりといへども、水ニ潜むの魚を
漁す、肌膚寒暑ふたへざれば、麻を績く、繭を繰る、支
體雨雪ふたへざれば、傘履を製し、神氣の有餘を以
て本氣の不足を補ふ、是より擴めて、二氣の物と云

所御考可被成候以上、安永庚子暮春

戲示學徒

一 學問ハ飯と心得べし、腹ふあくろ為なり、かけ物

なごの様人見せんずろ為ハあはれ

一 書物ハ金カ一の帳の中なるもの也、金たれた人の

りくむハ澁紙ぬむほどの用ふこと

一 學文ハムさたな様なり、そくとくを領こころきハ

用ひごとく、少一書を読めハ少一學者臭し、餘斗

書をよめハ餘斗學者ムく、おはりのなま

一 學文を芥の様ふゆり、上子浮たがる程

下地の水も今ハのまきだ

一 學文ハ置所よりて善惡らる、隣の下より臭の

先惡ト

一 學文ハ輕業のゆうみもろが、輕業ハ人を目

の下見おろし、人の天窓をぬむりのなり

一 衣裳うけくわづり、入みもろきんとまろハ賣

女なり、人の見時所躰をなし、人ハ譽らきんと

まろハ歌舞戲のりのなり、今の學者ハぢふ中

此真似もろ様なり

一 碁のうち様ハいつても、先をまきはまけぬものと我

も志有り、さうく道理ハのこもよ、態のさぬ、笑止る至。
一 足の皮ハあつとつと、ほろほろ皮ハうもたつと、
人諸共ニ小賢しく口ハさけど、行ひハ女童ニ見
限らる、さう故面の皮あつくなり、足の皮うもく
ま至、株ゆひ事多し、よく心得るほろむへし。

長州赤間關二人のうろ色女

豊前僧禪海

長州赤間ハ文字の關と相望る、山陽鎮西の間只
一帯の海を隔くとれど、行く船たへは、さう故
いなり町とて花街家とみ遊妓たくとへ、水ハ花

を誘ひ花は水小伴ふ中、大坂屋淺間といへる
者あり、いと同一國なる船木といへる里に貧し
りの子なり、朝食夕食は烟もたえくなれと、さう
が中、ふひとさうなり、十三ふちきり、おのろ母い
たくなやみりふ、卯月の頃むあしくなり、ぬ、歎た
のり、とに秋も来ぬ、鰯さうさう、お世を經うとくや思
ひらん、父此子ふむうひいひはる様は、家貧しく
く母あく霜雪のふせぎも心のまうあ、は、菘ふハ
たよりおうともあま、あは、行くんとも携へて出
り、う、娘さうさあ、ぬ様あをあやみ、菘ふ

ハウクハ行す一りのをとといひられむいなとよ是
 は關のうへ一通み道なりかたとに少一の用事
 一のへ夫より萩一行なり程なくの大坂屋
 一行十年期ふり金とり其身ハやうて歸りりり
 娘始く其事をあり唯ふし沈ふなた暮しなた明し
 りりりせんうとまりれと日數經川の中心りり
 直しおれもそむうまうハ不孝なりんとおしり
 くはうへと翌十四はうう色女の泣とめふ出
 ばりり只ひとまうに故郷の父こひく思へども
 山川なごてぬれば便どもおもふまうなりり色こと

心を盡し中少しお才覺し人しと關のうへ下
 呈給へともめられむ父も世渡り道ふりみ
 殊ふ我子の招くうとされむやがて来りそれをこの
 みふ家うりて住りりふぞ淺間も少し思ひなくさむ
 事となりる主願ひ日とれりりりり心あり
 此時ほきりり程の事おとあり心の中よひ川うへ
 りり此處の法ふ十年身をう呈期あきり三年の禮
 奉公はとめ其始あをつぎ一日ふいとまろるとなり
 心なりりり月日も水の流るおと十三年過し
 いとまろるとなり年とまろるとあきは出りり四月

母十三年遠忌^{後元}ありて、いとまろるる迄は八月なり、
 浅間^{あさま}やもひ煩^{わづら}ひりる様ハ、うろろ身^み一^{ひと}母^はの遠忌^{えんき}
 此^ことめんも心^{こころ}々^々、苦^{くる}一^{ひと}く^くい^いせん、只願^{ただ願}くハ水^{みづ}
 一の身^みとなりて、位牌^{ゐはい}はむうひ手を合^あせは、艸葉^{そうえ}の
 陰^{かげ}のあた魂^{たま}も、手むらる水^{みづ}のい^いうに心^{こころ}よう^{よう}ん^んと
 思^{おも}ひ、う^うつ言葉^{ことば}ももれられど、此事^{このこと}い^いひ傳^{つた}ふ^ふ人^{ひと}
 有^ある、孝女^{こうにょ}の志^{こころざし}をけぞるん事を本意^{ほんい}なく思^{おも}ひ、主^{しゆ}は
 おく^おく^くと^とあ^あへ^へられども、その妨^{さまたけ}とや思^{おも}ひさう^うん、
 これを哀^{あは}れと^とく^く人^{ひと}多^{おほ}く^くなりそ、男^{おとこ}は^は女^{をんな}ま^まそ、
 其夫^{そのあつと}も^もめ物^{めもの}一^{ひと}金遣^{かねづ}一^{ひと}終^{はつ}ふ際^{まは}と^とせぬ、浅間^{あさま}い

もん^{もん}く^くと^となく^くる^るに^にられ^れま^ま家^{いへ}よ^う一^{ひと}僧^{そう}を請^{まを}し、
 本意^{ほんい}の^のく^く佛事^{ぶつじ}は^はと^とめ、終^{はつ}ふ^ふハ船木^{ふねぎ}な^なる伊兵衛^{いへいゑ}と
 い^いへ^へを^をま^ま孫^{まご}と^とう^う町^{まち}ハ北國^{きたくに}屋^やと^と踊^{おど}一^{ひと}宅^{たく}一^{ひと}を住^{すま}
 居^いぢ^ぢぐ^ぐ心^{こころ}よ^よく父^{ちち}は^はつ^つく^く、抑^{おさ}此^{こゝ}伊兵衛^{いへいゑ}とい
 へ^へる^るの^のい^いう^うあ^ある^る縁^{えん}を^をぞ^ぞと^とろ^ろふ^ふ、浅間^{あさま}い^いと^とけ
 きた時^{とき}大坂^{おほさか}屋^やハ同^{どう}ト^トく在^あり^りる^る、う^うり^りを^をめ^め枕^{まくら}の
 身^みを^をう^うた^た草^{くさ}の根^ねを^をえ^え、難波^{なんば}ふ^ふま^まよ^よひ、長崎^{ながさき}ふ^ふお
 め^めむ^む、後^{のち}ハあ^あづ^づま^まの^のう^うこ^こよ^よゆ^ゆと、あ^あら^らう^う一^{ひと}て年^{とし}月^{げつ}
 を送^{おく}り^り、う^うろ^ろ、浅間^{あさま}い^いと^とま^まり^りて、老^{おい}く^く親^{おや}も養^{やしや}ひ^ひく

んとさそふ水もあり一うども、父が心よ得ざりけ
れを、おもひとどま里、手弱女のひとりも過一がと
りきは、其思ひは、くは伊兵衛ハ誠ヨありの
契なり、我ゆゑふ世またよりなれ身とはおれ玉
事こひくると、入しといひおとせとまはれ、あま
も其志をくわとくや思ひらん、ほくくと下里長を
妹脊とあまふりり、世の中は幸不幸過不遇ハ、誠ヨ
人力の及ぶ處はあつた、浅間ハ松の操をまてたる
は父の為なり、時めくわとふなびうざるハ父の為
お操を顯し、つるなり、うりともめ、枕ハ、伊兵衛ハ信

と立一ハ、遊妓の貞とつふ一、遊妓の貞とつふら
ハ、已純孝の者なれど、我親もより、はくへそんハ、
兼く志をりりるふこをと思ひやうきぬ、今ハ名も
くへく石とりつふなり、予ハ友溝部秀實安永ハ
赤間國の事ありて、赤間ヨ行て滞りし、此女の孝
状を、一と、船いそぎれど、つぶさるんハ事な
く、還りぬ、あつたに、翌申の暮又國の事ハつ
と、赤間ハ事多事敷旬、孝女の名おはえとされ、
彼此と物色し、つる處ハ、浅間ハ北國屋の妻とあま
猶八入といへる女あり、已ハ親のまがし、はら

合書下

上

と一頃我食の半をとりちて是をやあふあり
折柄浅間々舊里なる十兵衛とく者あふて其
あぬうなる事どもかくりていひりるハ親孝あり
のハ他人も厚し我同郷のちなみなれどつと
訪ひ一事有りにく一は獨打りたる男ありい
なる人よやとくば遠き所の人なり此町某の
家手代はくめ居まり然るふ此頃恙なく里便
るくともなれり哀におぼえ侍る程宿一はる也
と語りさうば久しく相あはるふやとくへ一と
問ひれむいまさふあはれ我つゆいこく漂泊し

身病ハ一は頃は世に情ある人あり慈愛うけと
うくして今日おあふなりさうとく遠國波濤の末
言傳ふさかどりの事たはあ一人の上をまなこの事
と思ひなせはいとく哀に覚え我夫つとく給ひ
一方に聊恩を謝する心と思ひ侍るなりといひ一
す物語て共ふひち里の中蓮の花見はけとる
心地一つ秀實あくらん人よは目のあうりあひと
こそ家産もせめとくやがく北國屋を訪ひらる
ふ皆むつす一げふよりつとひえ父ハ目はさやう
なう孫ども猶健よとへおらうや来り給ふなと親

子一酒出さつな清と取けくろひ、去づく酒
 へみ、孝女の物語さうるふ、親の已をいふいと押
 みく、心地少一ても例なる縁ハ、神と祈玉佛と頼
 る、賽のたゆる間もなれたるとくり笑ひ興ト、夫よ
 引手りのごもろせて、旅舎よりぬ、孝子とく
 世も聞ゆるハ稀なるふ、猶彼家ハお人ある
 よ一奇異なる様と思ひ、又八入ガ行状を人問へ、
 幼より孤となり、人ふ養ハき、其父もむなしくなる、
 母とちのえりの、已十三の年より病の末と押
 へ、誰とのむべさりのもなき程と、主願ひ、日とん

際おひ、湯水寝起の介抱し、りくより炊くを糧と
 とも貯へたれ程と、主より已とあくる子養をふくハ
 ち、ち十七の去と一と至るまで養ひ侍りし、ち、
 秀實瓜田と履をいふと、人も咎めんたれど、こを
 ちやめんも本意なり、此者をよひて逢り、ありの
 あり一十六色も木ハ劣りくく、酒はと
 出さうへられとも、いとより糸竹のちくべもあ
 只えぬやうの物語とも一つ、秀實あつはいつ
 こ来とまゐるをなれう身の上物語せよといひはれ、
 八入袖うと納め、さう事に候我ハせよたうひまた、薄

命ぢりりのよき候つりて赤間町粟の屋何某と申者
 此子よき候ひしう、生れく物く川より、父を失ひ
 侍り、其時我よひとりりの兄侍と、母ぢりりのも蟹の小
 船の楫をとへ、世渡る道のあつされも、人のさうしふ
 ふすりせ、兄をも人よ遣し、おらはまは外濱町喜三郎
 といへるものよ託し、其身ハさうさう小嫁しぬ、それより
 喜三郎夫婦と父母とちのさ候、頼し親も家貧しく、
 五川といへるに、身とあふさうし生、夢現ともさうま
 へど、程ぢり十三とりよよ成ぬ、然るに此年父と頼
 し喜三郎あやまつり井よ落入り、人の介抱よ引

上ををみまきバ、纒息はあまなげ、身は只あけよ
 なりぬといひりるが、今の様よや思ひなれりん、
 たまりり縁と泣出せり、暫ありて、心苦しき月日之
 ねくハさうりりのふく、頼む力も今はなく、八十餘日
 ながしと、終よまかなくなり侍り、それとあるん、
 又母と頼みし人も病起り、身うなハ、知心のち
 うとなく、人の賜ハさうりのあま、たをけりもなれりて
 まれども、手は川水をせく心地しぬ、只主情あり、
 朝な夕な、事のひく、飯炊き湯わたりて、あまを世
 しあふ人の抱き、も思ひきぬるも、あや

十六、今はうかき女の習ひ、身もぬりせうくくう
 此いとぬりある時ハ、うりそひいひ慰むるとも
 あれとも、又いとぬりた時ハ、心よあめくおとふ斗
 母は身の子やまゝたふ他事なれども、今朝ハ遅
 うりし、そのハはざういなど、聞え侍るもさうくふ
 苦しく、まゝなうぬ身をうりみ候、せめく我がとちも
 人よわううず、他事なくおとハ、方もあるく、うり
 うりの便とも頼むべき人よとも有侍らハ、おひ
 慰むるとも候べきん、うちだよ人よれと、うり
 また身を恨候とく、さめくと泣らう、秀實を縁て

實の母の行衛いうると問られども、それぞ其事にて
 候是も今は身を人よまうせ候ハ、うりも賤しき子
 りて、うりなど人よさうさなは、猶うた事のありりや
 せん、と深く我身をうり候へども、風の音信うり余
 所ハ聞あし、戀した時、手を合をなうこと拜むむ
 かりなると、又さううりむと、啼らうほど、満座岩木
 ぶあうざれと、袖あがぬりのもなうりり、げみや
 先ハ諸共親ハ捨られ、子なき、孝思厚れハ、
 今ハもや親の心も杖とも柱ともい、に他事を
 くおとふらん、世よ不是底の父母なう、古賢のい

ひし言葉とも思ひ出さる感一侍りぬ、秀實もあまり
哀なり、我も古郷は父母りて身なり、か
れ、物語聞えはけくもたつふく覺へ侍る
なり、よしや身ハ河竹のうたうしに沈むとも、久堅
の天津神地津神もとをまハ照し給ふへ、彌志
撓まずハ、まどかくてちちの心をまうども、志こ
ゆる日あらん、心くくとも時のりくを待へ、
今暫ハあき隙得せん、とく歸りて心静し母の介
抱せよとく、隙遣し別まぬ、秀實闕より歸り我を
訪ひ、此事をうりて哀とも催し、八入ガ行衛國

守の聞ても達し素意まげよかると、こりふ祈り思ひ
り、誠しせし教を立く人、品味を分つ時ハ、儒中
ハ異端をいむ、業ハ俳優娼妓を退くよといせんと
いへども、其人の志行ハ、道の異類よりつと異らむ、
業の拙よりより拙くす、此故ハ天地よりして
觀る時は、君子のより場ハ隔なく、其より處ハ賤し
は、是はとく、其徳を仰ぐまハ、天地の心よとむく
ブ、親の命のよむとく、これむ、心よとまうれとも
源賢の僧となり、淺間は遊妓たうとを得ば、誠
し女の道は、さるまどとれり、上は小衣るも我

拾葉下

三十二

つまなしくぬはまゝを縁と、と社守まとも不幸一
く身を落し、いゝく處も、其身のそがよハあゝど、うて
人之間、事あり、京師の遊妓三五といへるが、貞女
兩夫よまゝえむといへども、我ハ、うち縁結ため
よ、身を河竹のうたみ、よ、ゆみのつゆを待とくと
書く

たそやとを誰くはり、あのはまあむ

定めまた世ふとめると身ハ

と書捨し、よ、其情尤憐むべし、明末南京の院妓林
秋香といへるの、人よ嫁し、後むし、ちきり

あ、人よ、いひ送り、り、事有らるよあてへ

昔日章臺舞、細腰、任君攀折嫩枝條

如今寫入丹青裡、不許春風再動搖

これ光武のいとゆる、東隅よ失し、桑榆よ救む

よ、一旦節を失し、も、貞潔を操立とあり、おれを

花よ、時ハ、梅白く、桃紅よ、薔薇の色、の紫も、已が

いらくを春の風よ、綻ぢ、すぞ、ぞ、天地の心なるん

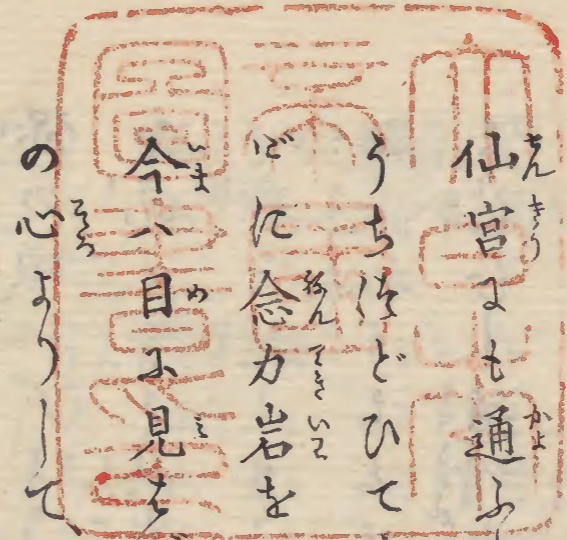
おれらの事思ひ、け、け、か、ん、う、よ、淨僧のお

た、い、遠流の令をめぐり、し、淺間が、いと、海とく、こ

よ、初々、夜よ、け、親のり、め、か、ま、へ、金左衛門が

鴨を得し、事は輕重ありといへども、皆至誠の志あり。一むるなり、已念るの心より、くる事ハ及びし。井も物より、かゝるをとりてめたし得る人なり。く過もなき、豊前中津川ハ、源豊後山中より出、羅漢寺に下り、た衆流と相會し、終に中津の城をめぐり、海よりけり、大河なり、是より一、一條の路あり、豊南に通へる往来より、人馬ひまなくゆき、く所なり、去り、その間岩尾高くそびへ、激浪岩根より、た春雨五月雨などい、く降る、まは夕立の俄に川上は催き、頃ハ人馬行をや、あや

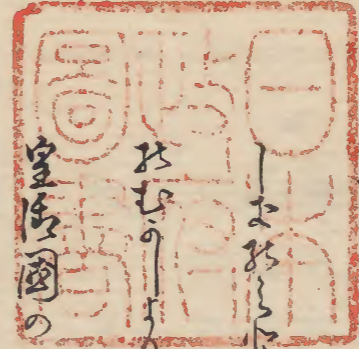
ま川に水は溺る、りの年毎の事なり、去る事。保の頃、江戸より回國の僧禪海と、り、の来、あれを見、誓く此岩をより、關と、後來溺没の難を救んと願を起し、り、それども碧嶂丹崖雲を吐納し、垂羅長松うち去り、空翠雨なきも、は絲は濕ひがちな、苦むし道滑なれ、世よその名、腐道といひ、な、ハ、く、中、く、此岩をうが、ん事、愚公が山なり、と人となあや、み笑ひ、ふ、それども此僧氣を屈き、經營やむとなし、其誠念らる、れ、次第、人感化し、吏民力を合さる事ともなり、石工の償出来



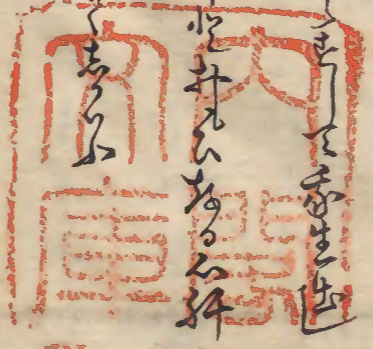
終^ひ三十餘年^よの星霜^まを經^への岩^いをま^りう^らみ^と
 三^え所^しすべ^くに長^まと百^ひ問^{もん}豎^た横^た二^ぢ丈^じ四^し方^{ほう}洞^{どう}中^{ちゆう}幽^{ゆう}邃^{すい}五^ご
 一^いと大^{たい}陽^{やう}明^{めい}通^{つう}ぜ^れむ處^{ところ}々^々岩^いと窓^{まど}を^うか^ちあ^れ
 仙^{せん}宮^{みやう}も通^{かよ}ふ^んと思^{おも}ふ^なり^{なり}人^{にん}馬^ば幾^{いく}ぢ^ぢ
 うち^ちは^はと^とひ^ひて^も何^{なに}さ^さち^ちる^る事^{こと}な^ら坦^{たん}途^とと^とハ^はな^なり^り
 念^{ねん}力^{りき}岩^いを^と通^とす^{とい}へ^る諺^{ことわざ}を^むり^りハ^は耳^{みみ}よ^よく
 今^{いま}一^{いっ}目^め不^ふ見^みを^して^ま去^され^れる^る百^{ひゃく}の^の事^{こと}廢^たる^るハ^はこ^この^の懈^たら^しみ^み
 の^の心^{こころ}よ^より^りて^て天^{てん}地^ちも^も感^{かん}動^{どう}せ^せ目^め不^ふ見^みぬ^ぬ鬼^{おに}神^{かみ}
 とも^{とも}役^{やく}さ^さる^るハ^ハ誠^{まこと}の^のや^やま^まざ^ざる^るよ^より^りな^なる^るハ^ハト
 二^に妓^ぎの^の事^{こと}秀^{しゆ}實^{じつ}が^が探^{たん}り^り得^える^る所^{ところ}と^と便^{べん}稀^きなる^る

う^うな^なれ^れも^もゆ^ゆく^くひ^ひ人^{ひと}は^は微^みさ^さる^る事^{こと}も^もく^く
 覺^{かく}東^{とう}ち^ちの^の筆^{ふで}の^の跡^{あと}ま^まぐ^ぐら^ら優^{ゆう}な^なる^る心^{こころ}な^なく^くを^を餘^{あま}
 所^{ところ}に^に聞^きか^かん^んも^も罪^{つみ}な^なら^らず^ずこ^この^のま^まに^にあ^ある^る
 侍^{さむらい}も^も近^{ちか}と^と程^{ほど}た^たより^{より}あ^ある^るこ^この^の人^{ひと}ハ^ハよ^よく^く其^{その}實^{じつ}
 を^を得^える^るか^から^らず^ず給^{たま}ふ^ふハ^ハこ^この^の餘^{あま}ハ^ハ力^{ちから}の^の及^{およ}び^びた^たつ
 孫^{まご}の^の侍^{さむらい}も^もは^はあ^あら^らず^ずハ^ハた^たが^が事^{こと}あ^あら^らず^ずト^トも^もか
 り^り侍^{さむらい}も^も

梅園拾葉卷之下



ちねのいと長くしそくしそくを阿まゆりまむ人の橋園松葉を
 ろよ見よとあそむし條に言葉ぬきみしつたて物よ共理とこし
 のし大人を是引り山の好まを後をまむる宮のちよあの実おり
 たり出る種を阿まゆりそくを遠くつたてのしつたてをすり目
 折しつ川へ阿まゆり求むるて阿まゆり人の多きをたれ三史五経の本と
 一はおしつたてしつたてしつたてしつたてしつたてしつたてしつたて
 おむのしつたてしつたてしつたてしつたてしつたてしつたてしつたて
 皇國の禮ありむしつたてしつたてしつたてしつたてしつたてしつたて
 ころん海のちねの多き飯をたのまむしつたてしつたてしつたてしつたて
 ちねのしつたてしつたてしつたてしつたてしつたてしつたてしつたて
 ちねのしつたてしつたてしつたてしつたてしつたてしつたてしつたて



三都

衆行

書肆

江戸日本橋通書明目	須原屋 茂兵衛
同 目黒橋通貳町目	山城屋 佐兵衛
同	須原屋 新兵衛
同 芝神明前	和泉屋 吉兵衛
同	岡田屋 嘉七
同 兩國横山町	和泉屋 金右衛門
同 浅草茅町貳町目	須原屋 伊八
京都寺町通松原	勝村 次右衛門
同 三條通寺町	九屋 善兵衛
大慈齋橋通安堂寺町	秋田屋 太右衛門

